横浜市民ギャラリーコレクション展2019

昭和後期の 現代美術 現代美術 1964-1989

横浜市民ギャラリーには約1.300点の所蔵作品があります。 これらの作品は1964(昭和39)年の開館以来、企画展や国 際展などの折に収蔵されたものです。横浜市民ギャラリーは、 1989 (昭和64/平成元) 年の横浜美術館開館まで市内の美術 施設として中心的な役割を果たしてきた側面があり、所蔵作 品にも当時の横浜の美術シーンが反映されています。1989 年は昭和の最終年にあたることから、当館の所蔵作品の背景 には「昭和」が深く関わっているといえるでしょう。平成の最 終年におこなう今回のコレクション展では、開館年より開催さ れてきた現代美術を紹介する年次企画展「今日の作家展」 の出品作家の作品を中心に47点を展示し、時代ごとの背景 などを踏まえながら横浜を舞台に発表された当時――昭和後 半期の表現を考察します。

最後になりましたが、本展のためにご尽力いただいた関係者、 関係機関の皆様に心より御礼申し上げます。

2019 (平成31) 年3月 横浜市民ギャラリー

初期の「今日の作家展」

10月に東京オリンピック開幕を控えた1964 (昭和39) 年4月、桜木町駅 前のかつて中区庁舎として使われていた建物を再利用し、横浜市民 ギャラリーが開設されました。「市民ギャラリー」という名称は初代館長 の山田今次 (1912-1998) が考案したともいわれ、その名が示すように 市民の創作活動の発表の場として待ち望まれた施設でした。一方で 当時の市長・飛鳥田一雄 (1915-1990)が「現代美術館構想」を持っ ていたこともあり、現代美術を紹介する「今日の作家展」が同年より 開催されました。前年の1963 (昭和38) 年を最後に戦後における先鋭 的な作家らの発表の場であった「読売アンデパンダン展」が終了して おり、今日の作家展のスタートにより現代作家の発表の場が引き続き 確保されたといえます。しかし読売アンデパンダン展が無審査かつ無 償で出品ができたこともあり、〈反芸術〉[※1]の気運の高まりととも に次第に過激な表現が増えていく状況も生み出した一方、今日の作 家展では針牛一郎 (1925-2010) を筆頭に瀧口修造 (1903-1979)、瀬 木慎一(1931-2011)、東野芳明(1930-2005)、中原佑介(1931-2011) ら、当時第一線で活躍中の美術評論家や批評家ら8~10名が作家 を推薦する形式がとられました[※2]。批評という作家らとは異なる立 場から、戦後「現代美術」の成立に深く関わってきた彼らの眼を通じ、 毎年14~22名の出品作家が選ばれました。複眼的に選ばれた作家 [※2] 初回は横浜現代美術館開設準備委員会、第2回展からは開催委員と改称。

らのバラエティに富んだ作品が一堂に並んだ光景は、様々な表現が 模索された同時期の美術界の状況の "一断面" を指し示していたと いえるでしょう。

(当時の美術界の状況のある一断面を示すのか、それとも網羅できるのか、と いう千葉成夫の問いに対し)

「それはやはり一断面でしょうね。つまり、会場はかなり広い けれども、人数が、その14人が適当かというのは、何か議論し たような気がするね。」(針生一郎)

(横浜市民ギャラリー開設25周年記念『今日の作家展1964-1989』横浜市民 ギャラリー、1990年 より)

同形式での展覧会は、横浜市民ギャラリーが関内の教育文化セン ターに移転する前年の1973 (昭和48) 年まで続けられました。

- [※1] 既存の美術表現を脱し新たな表現を試みた運動やその状況。日本では東野芳 明が1960年の読売アンデパンダン展への工藤哲巳 (1935-1990) の出品作に 対しこの語を初めて用いた。

1964-1973



図1 斎藤義重《ボウパンA・白》1971年 合成樹脂、アルミ板 72.7×60.6cm

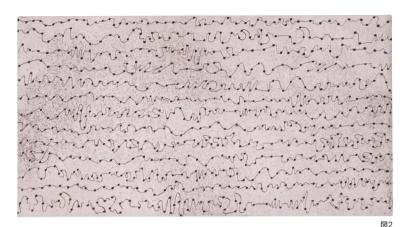






図2 草間彌生《無限(2)infinity》 1953-84年 エッチング 24.6×41.1cm

- 図3 岡田博《イマジネーション 靴》 1967年 靴の木型、絵具、白色下地、 キャンバス、パネル 70.5×91.5×14.0cm
- 図4 佐藤努《時間Ω》1948年 油彩、パネル(3枚組) 179.0×453.4cm

横浜市民ギャラリーの移転と 「今日の作家展」の変容

1974 (昭和49) 年7月、横浜市民ギャラリーは関内駅前に竣工した教 育文化センターの中に移転しました(1~3階が展示室、地下1階が事務室、ア トリエなど)。「今日の作家展 | は1971 (昭和46)年に「現代日本版画展 | として開催した以外は継続して催され、移転の年も11月に実施されま した。同展は今日の作家展として10回目の開催であることから、選考 委員の瀬木慎一がそれまでの9回の展覧会に出品した作家を選抜し 「今日の作家選抜展」を開催しました。翌年からも選考委員(後に「企 画」と呼称) は基本的に1名となり、同時に毎年テーマが設けられました (ただし1976年は例外的にアーチスト・ユニオン[※6]が企画)。作家らは時に難 解なテーマに立ち向かうように様々な作品を発表しました。1973 (昭 和48) 年のオイルショック、高度成長の終了などを受け日本の社会が 新たな局面へと向かう時期でもありました。

[※6] 吉村益信 (1932-2011) が呼びかけ1975年に結成。

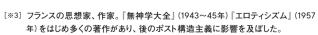
02 1974-



戦後、再び入ってくるようになった海外の美術界の動向からの影響 や、国内の従来の美術やその体制に対する疑念より、具体美術協 会[※7]がおこなったアクション・ペインティング的な活動など新しい 表現が出てきました。一方で1956(昭和31)年の「世界・今日の美術 展 | [※8] においてアンフォルメル旋風が起こったことを機に作家らは 絵画に再び取り組むようになりますが、70年代にはその意味を解体 するような「平面」という言葉も登場し、同時代において絵画はその 内容ではなく物体性を意識して制作される傾向が見られました。馬場 彬 (1932-2000) や、横浜を基盤に活躍した千田高詩 (1914-1988)、稲 木秀臣 (1932年生まれ)らは、幾何学的なモチーフや線、平板な色彩を 用いながら各自の表現を追求しています。 高松次郎 (1936-1998) は 多様なメディアを用いて作品を発表、国内および数々の国際展で 活躍してきましたが70年代後半以降絵画に回帰しました。また池田 龍雄 (1928年生まれ) は戦後、風刺を伴った独特のペン画でキャリアを スタートしましたが、60年代の概念芸術への取組みを経て1973(昭 和48)年から15年間に渡り絵画シリーズ〈BRAHMAN〉を描きました。 1977 (昭和52) 年の 「今日の作家展 | のテーマも 〈絵画の豊かさ〉でし たが、菅木志雄 (1944年生まれ) や李禹煥 (1936年生まれ)、榎倉康二 (1942-1995)ら〈もの派〉の作家らが多く出品し、既存の概念に捉われ ない作品を発表しています。

- [※7] 1954年、吉原治良 (1905-1972) の元に前衛美術家らが集まり 「具体美術協会 | を 結成。1957年フランスの批評家ミシェル・タピエ (1909-1987) が来日し 〈具体〉 を評 価、海外でも「GUTAI」と呼ばれ展覧会や研究がなされている。1972年解散。
- [※8] 1956年から翌年にかけ、日本橋高島屋(東京)から大阪など3地を巡回。アン フォルメルは50年代にヨーロッパで広まった抽象的な絵画の動向で同展で初め てまとまった形で日本に紹介された。

岡本太郎《まひる》1963年 油彩、キャンバス 91.1×73.1cm



岡本太郎 (1911-1996) は「今日の作家展」に出品していませんが、戦

前、戦後を通し活躍した代表的な作家の一人であり、横浜市民ギャ

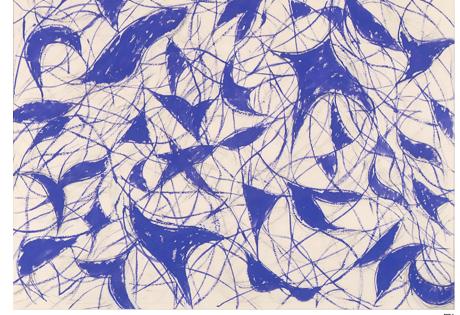
ラリーにおいても1967(昭和42)年に初めて開催された企画個展の 作家でもありました。1929 (昭和4) 年にパリに渡り、シュルレアリスト らやジョルジュ・バタイユ (1897-1962) [※3] と交流、マルセル・モース (1872-1950) [※4] のもとで学ぶなど、制作と並び芸術について深く思 索する日々を送りました。1940(昭和15)年に帰国、従軍後に岡本太 郎は1948 (昭和23) 年に花田清輝 (1909-1974) [※5] らとともに「夜の 会 | を結成、前衛美術活動を始めました。 岡本の活動は作品制作に 留まらず、多くの著作の執筆やメディア出演など多方面に渡りました が、通底していたのは「芸術は、つねに新しく創造されなければならな い」(岡本太郎『今日の芸術』光文社、1954年)という信念や、相対するもの の一方に偏向すべきではないという「対極主義」でした。当館の個展 の直前には、1970(昭和45)年の大阪万博のテーマ展示プロデュー サーに就任しています。岡本自身も巨大な《太陽の塔》を会場に設 置した万博には、多くの美術家らがパビリオンに携わる一方、反対の 立場を表明した作家らは〈反博〉活動をするなど、戦後美術の一つ

[※4] フランスの社会学者、文化人類学者。代表著作は『贈与論』(1925年)。

[※5] 文芸評論家、作家。著作に『アヴァンギャルド芸術』(1954年)など。



図1 高松次郎《青の線と面》1983年 ガッシュ、紙 46.6×64.8cm ©The Estate of Jiro Takamatsu, Courtesy of Yumiko Chiba Associates



の分岐点となりました。

岡本太郎

- 図2 千田高詩《LA VIE (白)》1974年 油彩、キャンバス 117.0×91.0cm
- 図3 池田龍雄《連作BRAHMANより V章 点生》1981年 油彩、アクリル、紙 53.7×76.7cm
- 図4 馬場彬《垂直志向 '76》1976年



03

-1989



菅木志雄《Spreading Wood '86》1986年 木、自然石 440.0×240.0×42.5cm

〈もの派〉の台頭と「今日の作家展」

〈もの派〉とは、主に1970年代より現れた、素材や物体を組み合わせ 作品として提示する作家らのことをいい、その誕生のきっかけは1968 (昭和43) 年、関根伸夫 (1942年生まれ) が地面の土を掘り返し傍らに円 柱状に積み上げた《位相-大地》を制作したこととされています。李 禹煥、榎倉康二、吉田克朗(1943-1999)、菅木志雄、小清水漸(1944 年生まれ)らはもの派の作家とされますが、当時作家ら自身がグループ を結成したわけではありません。彼らの中には菅、吉田など多摩美術 大学で斎藤義重 (1904-2001) に師事した者が多く、その制作理念の 背景に斎藤の教えがあったとも考えられています。つくることからの意 識的なかい離、また美術の領域に活動を絞った彼らの態度は、60年 代までの反芸術的な様相と傾向を異にするものでした。「今日の作 家展」ではもの派の作家を早くから紹介しており、中でも菅木志雄は 1970 (昭和45) 年より6回も出品を重ねています (以降1977年、1978年、 1979年、1985年、1986年)。 菅は現在も一貫して木材や石、 簡素な人工 物を用いて制作をおこなっています。

多様化する80年代

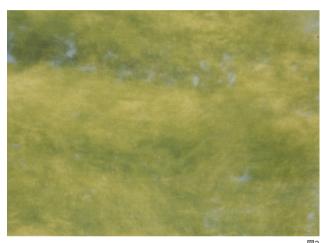
80年代に入ると、好景気を受け海外との距離が狭まったこともあり、美 術状況も海外の影響を受けながら、どの表現ジャンルともより多様化し ていきます。また、この頃国内で美術館の建設が相次ぎ、展覧会の数 そのものが多くなりました。1980 (昭和55) 年、1981 (昭和56) 年の 「今 日の作家展 | に出品した川俣正 (1953年生まれ) など国内外の垣根なく 活躍する作家もこの頃より増えました。「今日の作家展」では定着しつ つあったインスタレーションを掘り下げた「インスタレイションとは何か」 (1985年)を始め、多角的に同時代の美術を紹介しました。教育文化セン ターには天井高およそ6メートルの吹き抜けのある展示室がありましたが、 大型の絵画やインスタレーションが同室を中心に発表されました。

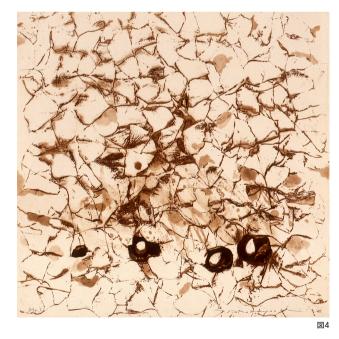
版画表現の広がり

1960年代以降、海外の主にポップ・アートの作家らが用いていたこ とから、日本の美術家の間でも写真製版ができるシルクスクリーンを 中心に自分の表現の中に版画を取り入れる動きが出てきます。また、 1951 (昭和26) 年の第1回サンパウロ・ビエンナーレで斎藤清 (1907-1997)、駒井哲郎 (1920-1976) が受賞したことを皮切りに日本の版画 表現が国際的に注目を集め、国内の版画家らが様々な技法を編み 出し多様なイメージの版画を発表しました。中林忠良 (1937年生まれ) は 独自に確立したコピー転写法を用いて銅版画の表現を追求した版画 家ですが、〈もの派〉の一人として木材や金属を用いた立体作品を 発表しつつも同時期からスナップ写真を用いたシルクスクリーンやフォ トエッチングを手がけた吉田克朗のような作家もいます。「今日の作 家展」でも初期から多くの版画作品、版画を用いた表現を取り上げま した。昭和後期には版画の概念そのものが拡張されたといえます。





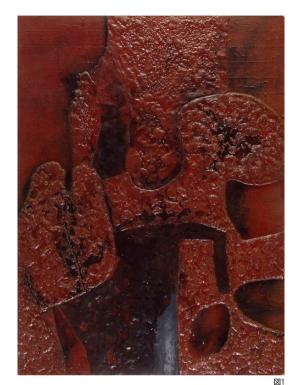




- 図1 若江漢字《Winter》1990年 ステンシル 66.5×50.5cm
- 図2 吉田克朗《Work"171"》1988年 フォトエッチング 35.9×52.3cm ©The Estate of Katsuro Yoshida, Courtesy of Yumiko Chiba Associates
- 図3 秋岡美帆《そよぎ Sway》1988年 NECO、麻紙 77.0×107.0cm
- 図4 中林忠良 《転位'88-地-Ⅲ(横浜B)》1988年 エッチング、アクアチント 40.3×40.5cm

第3章 -1989 (-昭和64) 第3章 -1989 (-昭和64)

吉仲太造、その表現



an managin	Market mark	S IDAKON	Haptistanni	MARKETAL CONTIN	REPAINING.	SAME AND ASS.	THE OWNER OF THE OWNER	Mumount	and marine
*************	****************	19940000001	. 1000000000000000000000000000000000000	ritaina mata	Manuscriat .	20000000000	tequesties	teremeriere	interes
mannix	BRIGHTS SALL	allegati(Athar	- CONTRACTOR OF	MANUAL DISEASE	District of the last	BHOMOME	MANCHERATOR	AMENDE DA SOLE	NAME OF STREET
imprestit	10000000000000000000000000000000000000	Mugamaguil.	PROSERVATIONS	-	hotossesses	Storagoined.		100000 1000	nuami
hinning	Table 100 house	MANAGE PROPERTY.	Notes of Contract of Street, S	Tatalan Maria	THE RESIDENCE	DESCRIPTION OF PARTY	THE RESERVE	arrestring)	THEOREM
11111111111111	a binnista na ari	100000000000	1001011010101	stickweent	Mend (bendke	emeilmilet.	storittentie	termenterer	Inciden
MANUAL PROPERTY.	THE PERSON NAMED IN	Metacolists	Mantiferral Miny	action accounter.	TANK MANAGEMENT	Incommittant	attitude trave	MANAGEMENT OF	STANDARKE STA
in the first term	instructions in	ionestati	Manistrial	Michiganista	Statement lett i	Montessori	indiana.	itimiqueer	teretters
AVE INTENTA	No and Address of	HEATON SANCTON	AND THE REAL PROPERTY.	Tel State of Lat.	SHOW DIVINE	- Moral Moder	MANAGEMENT	MODERAL WAY	MARKER
mmmm	incomments of	P909) 2000 232	Insument	Sérence Sicon	Of Deposits and	meetenates	hemme	minumic	literario
THEFT	No. of Street,	RED IN STREET	SEINE NAM.	Restrictant	MATINE COM	AMERICAN A.	WOULD IN		SHRIBBIG
nagemen	hosperend	DESIGNATION	movement	foremided.	të seseretetë	Mantendier	Investicer	manne	Herrican
THE PERSON NAMED IN	TANDED BER	PRIVING	4.0.00000	Manage Street	TO INCOME IN		PRINCIPALITY	PURINING.	THE REAL PROPERTY.
mound	describerari	Daine trever	100022500000	NAME OF THE REAL PROPERTY.	Stem-totald1	romanich	need described	Himmite	incutteer
THE REAL PROPERTY.	Decembe	MOTORINA	- BESTHUNK	-		pauttan	HOI III III II	THE STREET	THE OWNER.
Marasan	Inidiates	posonisovan	hitmonomat	Model Sensions	r School de Arteriories	Teconitri i dec	Mercentinger	theresterica	naman
THEFT	Tommismel	Distriction of the last of the	DESCRIPTION	-ounieq	ALCOHOLD IN		and to make	THE REAL PROPERTY.	manth
mannin'	Managanes '	hachoppassod	Mental Minis	Middledopant	filmmissideli	strictMentel	Medinimental	inremieri lei	inama
DATE DELINE	and the same	אתותותות			MAN MICH	STATE CONTRACTOR	MODERATE		Trelling.
MINISTER OF THE PERSON NAMED IN COLUMN	bestypingen bestypingen	healthinists	NAMES OF THE PARTY	particularity of a	Service Committee	metarid molecular	geneugentlich	innerforevie	pomercon
						Section 10	ALTERNITATES	CHARLES IN	mania
menni manin	parameters.	designation of the last of the	Philippetol .	Reverserationers	Meaning and American	dalam rendirid	(Missare angeling	himiscone	numum
		Charles &		Literal Bill	ALL DEPOSIT		ACCOMPANIES.	THE REAL PROPERTY.	annut at
bettern bill	Direction	Hampionner	Managery anny	AMARKACIANI .	Statistististis	THE REAL PROPERTY AND ADDRESS OF THE PERSON	ammun	Horaya lightar	minim

吉仲太造は、戦後より80年代半ばまで様々な作品を発表しました。 1955 (昭和30) 年には岡本太郎が前衛画家らを集めた二科会第9室 に出品、また同年タケミヤ画廊で瀧口修造企画のもと初個展をおこ なうなど[※9]、当時の前衛美術界を牽引する人物らに見出され、 1956 (昭和31) 年の「世界・今日の美術展」にも日本人作家として選 出されています。また「今日の作家展 | にも4回出品しており(1965年、 1974年、1975年、1976年) 昭和後期を代表する現代美術家といえるで

吉仲の作風は幾度も変わりますが、一貫して絵画 - 平面の作品を か | [※10] と分析しています。 発表しました。1950年代半ばまでは幾何学的な画面構成に原色を 用い、作中には一部具象的なモチーフも登場しましたが、1960年 代には画材をパネルの上に盛り上げた《母子》[図1]に始まり、次第 に何らかの物質を敷き詰め、"描画から離れた"作品へと移行します。 《死の売り声(釘A)》[図2]は先行するボタンやかみそりなどを貼り つけた作品から派生したもので、釘はいずれも整然と、綿の布団に 寝かされたように並べられています。鋭敏な釘の攻撃性と、静謐さを 兼ね備えるその印象に、「死」と「売り声」という相反する語が重ね 合わせられます。次いで主役となったのは釘の下に敷かれていた新

聞紙です(《碑》[図3]、《大いなる遺産》[図5])。吉仲は不動産欄や株 式欄を使用し、用いる欄と文字の方向の統一を所によって変えるこ とで、遠くから見た際に画面に陰影を生じさせています。不動産欄、 株式欄には必ず数字が記されています。美術評論家の光田由里は このことについて、「社会のなまなましい経済活動が、最も無機質な 数字の羅列によって表示されている。数字を「異質物」として扱って きた吉仲にとって、この欄の整然とした幾何学性は、彼が見通そうと する経済社会の、ひとつのアイロニーと映っていたのではないだろう

吉仲は60年代以降に起こった様々な美術界の動向に直接参加しま せんでした。外部の目まぐるしい変化に相対する自身の内部の客体 化に専念し、以降も吉仲は絵画の可能性を模索していきます。

主仙大浩(よしたか・たいぞう)

1928 京都市生まれ 1946 京都人文学園絵画部 (後の行動美術京都研究所) に学ぶ 行動美術展に出品を始める(1951年会友)

1952 上京

1953 行動美術賞受賞

1955 アートクラブ (岡太太郎発案. 1953年結成) の会員となる 初個展(タケミヤ画廊) 二科会第40回展第9室に出品、

会友となる

1956 「世界・今日の美術展」 (日本橋高島屋他) 出品

1957 読売アンデパンダン展出品 (1958、1961)

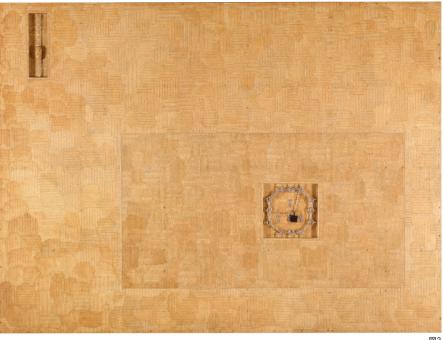
1961 二科会脱退

1971 闘病が始まる

1975 「吉仲太浩 '55-'75展」 (横浜市民ギャラリー)

1985 逝去 (享年56歳)

上記のほか個展、グループ展多数









- 図1 吉仲太浩《母子》1961年 顔料、砂、パネル 242.3×181.9cm
- 図2 吉仲太造《死の売り声(釘A)》1963年 新聞紙、釘、綿、白土顔料、パネル 181 5 x 181 8 cm
- 図3 吉仲太浩《碑》1964年 新聞紙、鉄鎖、鎌、パネル 181.6×242.4cm
- 図4 吉仲太造《夜》1974年 シルクスクリーン、油彩、キャンバス 917×1168cm
- 図5 吉仲太造《大いなる遺産》1967年頃 新聞紙、鉛筆、パネル 181.8×226.8cm

吉仲作品の材料調査

2018 (平成30) 年12月、吉仲太造作品のうち、《母子》、《死の売り声(釘A)》、《大いなる遺 産》の3点について、材料調査を実施しました。調査方法は溶剤テスト、紫外線反応テスト、 および蛍光X線による分析で、その結果を組み合わせて使われている材料を判断します。 《母子》については表面の黄色から金に見える部分は、鉄分を含む顔料、また赤色の部 分についてはカルシウムが検出されたためレーキ顔料と判明しました。《死の売り声(釘 A)》は釘を覆っている白色の部分に石膏が含まれているかどうかが不明だったのですが、 今回の調査により白土顔料ではないかということが分かりました。《大いなる遺産》は表 面にコーティングのための合成樹脂が塗られていること、また洋服の型紙状のパーツの周 囲の影のような部分は鉛筆であろうということが分かりました。今回調査した作品はいず れも近年修復やクリーニングもおこなっています。当館では今後も作品の良好な状態を維 持するための修復や、研究のため調査を進めていきます。 調査実施:株式会社シー・アール・エス



蛍光X線分析装置を使用しているところ

特集展示 吉仲太造、その表現

^[※9] タケミヤ画廊は1951~1957年に神田にあった画廊。瀧口修造が推薦した若手 作家の個展はおよそ6年間おこなわれた。

^[※10] 光田由里「画家 吉仲太造」、『戦後美術を読み直す 吉仲太造』 1999年、松

INTERVIEW

当館では2014 (平成26) 年より、企画展にあわせ横浜市民ギャラリーにゆかりのある方々のインタビューをおこなっています。 今回は出品作家の中林忠良氏、若江漢字氏にお話をお聞きしました。

※インタビュー映像を本展覧会場で上映します。また、横浜市民ギャラリーホームページ上で公開する予定です。

中林忠良

インタビュー

2019年1月10日 中林忠良氏アトリエにて 聞き手・編集: 齋藤里紗



銅版画との出会い

僕の世代は初めのうち、大学でも版画に触れることがあまりありませんでした。ところが3年になって駒井哲郎先生が指導された集中講義があり、そこで初めて銅版画というものを見たり経験したりし、銅版画の良さを理解しました。油彩画はぬるぬるした絵具で、筆も柔らかい。キャンバスも弾力性があります。柔らかい支持体に柔らかい絵具を柔らかい筆で塗っていくことは僕の体質とは本質的に合わなかったんでしょうね。銅版画は、固い版、固く鋭い鉄筆を使います。また作品が出来上がっていく段取りがしっかりしていて、その段取りを順序よく踏まないと表現に至らないという、その仕組みそのものが自分に非常に合うと思いました。

70年代の版画の隆盛

1968年に野田哲也さん (1940年生まれ) が東京国際版画ビエンナーレで大賞をとりましたね。ヨーロッパやアメリカでは日本のことを版画王国と呼ぶようになります。日本の絵画文化では版画が抜きん出た表現方法でした。もう一つ、版画は新しい表現方法を誰もが模索して確立していくことができ、現代的な社会の要求、美術界の要求をいち早く取り入れ新しい表現を獲得していました。そういう背景があり、当時版画が隆盛していく時代を迎えていました。僕たちが若い頃は例えば賞を貰うとか、「今日の作家展」もそうですが展覧会に選ばれること

で、これでいいんだ、これで一所懸命やれるんだと 後押しされた幸福の時代だったと思います。

助手時代の社会状況と作品

僕は東京藝術大学(藝大)で学び助手になり、藝大の教育システムに不満は持っていませんでしたが、一方で学生たちが言うもっと開けた美術教育、新しいことに踏み出していかなくてはならないということはよく理解できました。だけど立場上学生と教授会の間にあり、どちらの言い分もわかるという苦しい状況でした。そういう個人の立場、在り方、あるいは個人の活動と群。まさに大学紛争はそうでしたが、集団が持つ力の中で、個がどうあるべきなのかは僕の作画テーマの一つにもなりました。《連なる風景》(1971年)や《剥離される風景》(1972年)も大学紛争の余韻の中、社会を自分の目で改めて見るという作品でした。[図1]

在外研修と作品の変化

僕の中では《囚われる風景》(1973年)、《囚われる日々》(1974年) あたりで、銅版画のあらゆるテクニックが自由に使いこなせるという自負が生まれていました。その頃、文部省から1年間外国で学んで来なさいと余裕を与えられたわけです。僕はパリのエコール・デ・ボザールで一般の学生と一緒に勉強した方が、大学の制度や教授と学生の関係等も理解できると思いそうしたかったのですが、教室



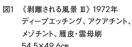


図2 《Position '78-1 枝》1978年 エッチング、アクアチント、雁皮刷 49.6×49.6cm



に入ってみると日本から来たエッチャーだと大きな関心を集めてしまいました。すると自分で仕事をしている気分にならず、もっぱら美術館へ通い、ヨーロッパにおける銅版画の伝統をビブリオテークナショナル(Bibliothèque nationale de France:フランス国立図書館)で勉強しました。それはドイツに行っても同様、ウィーンでもアルベルティーナに通い詰め、見ることに学ぶ視点を変えて一年間過ごしました。でも制作をしていない作家というのは気分的に不安になるんですね。だけど仕事をする場がないのでそのまま帰国するのですが、地面に足がしっかり着いていないような、浮遊感にずっと付きまとわれていました。

帰って来るといろんなことがありました。一つには 駒井先生が亡くなる(1976年11月)。亡くなられてみ ると(藝大の)版画研究室を自分が背負っていかな くてはならないという大きな責任感、またヨーロッパ で学んできたことを作品にしなければという思いが 出てきました。それで冬場でしたが研究室に目貼り して、寝泊まりして仕事をしたんです。そしたらいっ ぺんに体を壊しました。最初なぜこういう状況にな るのかさっぱりわからなかったのですが、そのうち 仕事で用いる薬品の中に原因があることがわかり ました。それでドクターストップとなり仕事を半年程 やめました。その後、新しく仕事を始めるためには 何から始めなければいけないのかと、大変悩みまし た。どうやって浮遊感を埋めて自分が地面にしっか りと足を踏まえてものが言えるようになるか。そこで 自分の環境の中の身辺に近いものをモチーフにし、 それによって自分を改めて認識し直すことから始め たのです。最初は工事現場から拾ってきた木片や、 路傍にある石ころや草を使ったりして、それまでの 銅版画のポエムを謳うというようなところから何段 も降り、原始人が自然と向き合うような気持ちにな りたいと思いました。[図2]

〈Position(位置)〉と〈Transposition(転位)〉

〈Position〉は自分の立ち位置を確認する、一つひとつ作り上げていくという作品で、描いたのは植物が多いです。そうこうしているうちに、作品を通して銅版画の仕組みを考えたくなりました。つまり版画は転位をしていく。頭の中のイメージをモチーフに仮託し、そのモチーフを――僕の場合はコピー転写という新しい技法なのですが――コピーに転写して、そのコピーが版に転写され、版から紙に転写する。転写の繰り返しで作品が成り立つんです。そこで、「転位」という言葉を使うようになりました。ですから、より銅版画、版画の仕組みをテーマにするというシリーズです。いずれのシリーズも今日まで制作しています。

コピー

人間が作る絵よりもコピーの中に現れる自然の方がざらざら感、手触り感があります。それから現物が持っている、言わば造物主がつくった自然界のバランスのようなものからも学びたいという気持ちがありました。

腐蝕

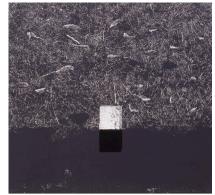
中学3年か高校に入った頃か、金子光晴さん (1895-1975)の「大腐爛頌」という詩に出会い、大変影響され、感化を受けました。それはしばらく忘れていたのですが、帰国し自分の体を壊してみると、自分は銅版を腐蝕しながら自分自身を腐蝕していたと思い当たるんです。それで腐蝕を改めて見直しました。それと僕の生い立ち、疎開児童ということや、マイナーなものに対しての親和感みたいなものも手伝って、全てのものは腐るんだと、腐らないものはないという思想に辿り着くわけです。

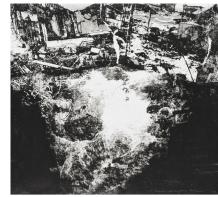
駒井先生も腐蝕にとらわれた人だと思いますが、この仕事はなかなか面白い。あるところまでは思い通りになるんだけど、どうしても自分ではつくれなかった、表現できなかったものが出てくることがある。それは腐蝕という化学反応の不思議さみたいなものですが、自分だけではなく、自分と腐蝕から現れてくるものが寄り添って表現となっていくような気がします。

白と黒

ある時、当たり前のことなのですが、自分が仕事した ところが黒くなるということに気付きました。 つまり僕







の場合は、描いて腐蝕し、凹みを作ってそこにインク を詰め、プレス機の圧力で紙に転写しますが、自分 が一所懸命仕事をするところは黒く現れて、仕事を しなかった、つまり触らなかった部分は銅版そのもの で白くなる。仕事をするところとしないところとのせめ ぎ合いで作品が成り立つんだと。そこで白い四角形 が画面の中に登場します。人間は程々に自然と関 わるのがいい姿ではないか、やりすぎると今日のよう に地球までも駄目にしていくように、人間の業という のは程々に、触るところと触らないところが拮抗、あ るいは調和するかたちが人間の生き方、あるいは社 会の在り方なんじゃないかと。世の中も相反するこ とで成り立っています。例えば昼と夜とか、清いとか 汚れるとか、生と死とか。腐蝕液の力を借りながら、 自然の持っているものと自分の中のものが一つにな る。そこが目指すところかなと思っています。

〈転位-地-〉

横浜市民ギャラリー収蔵作品

立った状態で下を見ると地面があります。普通、地面は自分の足の下にあるから意識しませんが、切り取って自分と対等の位置に置いてみたらどうだろうかと。実際にやってみると、地面と自分が対等に語り合える位置関係になる。これは面白いと思い、多くの人たちにこうした意識を持って自然界あるいは自分の立つ場所を見て欲しいという願い、そこで「地」というタイトルになりました。

《転位 '88-地-Ⅱ(横浜A)》

針金、そして釘があります。針金は鉄筋を結びとめるもので、用がなくなると切りとられ捨てられていた。これは横浜美術館の工事現場なんです。横浜は好きな場所で、中華街があることもあって、よく行っていました。[図3]

《転位 '88-地-Ⅲ(横浜B)》

日本大通りは銀杏並木が有名ですよね。そこに落ちていた銀杏と銀杏の葉っぱ、どちらも足元にある何の意味もないようなものを拾い上げて絵にしています。[p7、図4]

《転位 '90-地-Ⅱ》

こちらはまさしく芝草の地面で、中央下の黒の部分だけ2回刷っています。1回刷ってインクが乾いた上にもう1回刷ると油がそれ以上紙に吸い込まれないので、 艶のある黒い色面が出来上がっています。[図4]

近年の制作

東日本大震災の時は映像を見て非常にショックを 受けました。宮城教育大学にいる僕の教え子が車 を出せると言ってくれ、見ないと先に進めないよう な気持ちもあり一昨年の春、二日間被災地を訪れ ました。海岸でしたがもちろんがれきは取り除かれ て、草が生えて、風が渡っていました。74人の児 童が亡くなった大川小学校の跡がそのまま残って おり、そこは僕にとって3.11の象徴的な場所に思え ました。また、最近のテレビや新聞等で報じられる 社会の、何という言葉で言っていいかわかりません が嫌なことに出くわすことが多いと感じるようにな り、人間の社会、あるいは自然も、もっと穏やかな 光に包まれないかと願うようになりました。その願い が自分の中で強くなってきまして。「光」という言葉 は、若い時だったら使わなかったと思いますが、わ かりやすくして自分のイメージを人に伝える工夫も 必要かなと、ありふれていますが光という言葉を入 れました。大きなタイトルは〈Position〉から日本語 の〈位置〉に直しました。それが現在です。[図5]

- 図3 《転位'88-地-II(横浜A) 》1988年 エッチング、アクアチント 39.6×39.9cm
- 図4 《転位'90-地-II》1990年 エッチング、アクアチント、ステンシル (2版刷り) 55.5×59.5cm
- 図5 《位置'17-光-VI(怒)》2017年 エッチング、アクアチント 36.5×40.0cm(6枚組のうち3)
- 図1、2、5は中林忠良氏蔵、図版提供 図3、4は横浜市民ギャラリー蔵 (図3は本展出品作)

中林忠良(なかばやし・ただよし)

- 1937 東京府品川区生まれ
- 1944 新潟県に疎開(1948年帰京)
- 1959 東京藝術大学美術学部絵画科 油画専攻入学
- 1963 東京藝術大学大学院美術研究科 版画専攻入学、駒井哲郎に師事
- 1965 東京藝術大学大学院修了、 同大学副手 (1969年助手、1974年講師)
- 1969 日本版画協会会員推挙
- 1975 文部省派遣在外研修員として ヨーロッパ、アメリカに滞在
- 1978 東京藝術大学助教授 (1989年教授)
- 1996 第39回埼玉文化賞受賞
- 2002 社団法人日本版画協会理事長(~2012年)
- 2003 紫綬褒章受章
- 2005 東京藝術大学教授退任
- 2014 瑞宝中綬章受章

個展、グループ展多数

現在、東京藝術大学名誉教授、版画学会名 營会員、大阪芸術大学客員教授、京都造形 芸術大学客員教授、日本美術家連盟常任理 事、日本版画協会理事

若江漢字

2018年12月26日 若江漢字氏アトリエにて 聞き手・編集 | 齋藤里紗



制作手法の変遷について

1966~67年頃には、シルクスクリーンで写真の網点を版画にする作品をつくっていました。そうした版画を色々つくって発表しているうちに、写真がそのまま作品になっていきました。だからどこから版画が写真になったか、自分の中で曖昧で。例えば東京国際版画ビエンナーレに出した時(1974年11月16日~1975年1月12日、第9回展。東京国立近代美術館)も半分以上写真で出来ている作品です[※1]。ほんの少しシルクを使ってる。かなり早い時期から写真の仕事をしていました。[図1]

写真機が一番近代を要約していると思います。科学技術で芸術作品が出来てしまう。今から150年以上前に写真機が発明され、機械が――今でいうとAIです――芸術をつくってしまう、というとんでもないことが始まりました。我々はもうこういった体験をしているんです。写真機は近代を腑分けするメスです。それに気が付いたらとても面白くて。

1969年、アメリカが月にロケットを送り込みました。 それは凄い快挙だと、それを記念する版画を刷り ました。アメリカの星条旗を切り開き、星の部分を 空に見立て、白と赤の部分をロケットの噴射にした ものでした。そしてこの作品を、東京で日本の版 画を集めて海外に輸出しているアメリカ人のところ に持っていったら、ひどく怒られました。ポップ・アー トはアメリカの、アメリカ人のアートだと言うんです ね。それはポップ・アート的な作品だったんです。でも 「そういえばそうだよな」と。アメリカの60年代とい うのは車がたくさんあって、郊外に何千台も停めら れるショッピング・センターがあって。でも日本はまだ ジーパンすら売っていない。我々は米軍の払い下 げのジーパンを直して履いていました。ポップ・アー トは大量生産・大量消費の美術なんです。だから 社会状況がそうなっていないのに、ポップ・アートを やるなんておかしいと。それで写真で作品をつくろ うと思った時に、「じゃあ一体全体アートって何なの かしと。だから写真の仕事のコンセプトは「アートと は何か」というのが大前提です。視覚芸術を実験 するのには写真が一番面白い。写真の仕事は今

図1 《見る事と視える事-鉛筆-74-II》 ゼラチンシルバープリント、コラージュ 東京都現代美術館蔵

[※1] 《見る事と視える事-鉛筆-74-Ⅲ》を

出品、文部大臣営を受賞。

図2 「今日の作家70年展」《対峙 2》 展示風景



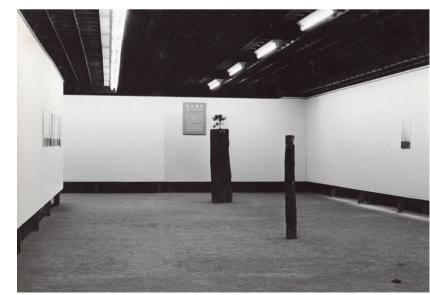


図 1

も続いていて、新作もつくっています。70年代の 終わり頃からインスタレーションもやりますが、その 中にも写真が使われている。インスタレーションも 今でもやっています。

1970年の「今日の作家展 | (「今日の作家70年展」)で も写真とオブジェを使いました [図2]。だから一種 のインスタレーションをもうその頃にやっていたので すが、意識的に始めたのは70年代の終わり頃で、 テーマは「社会とは何か」です。80年代に始まる 絵画のテーマは「私とは何か」。三つのメディウム を通底する一つのテーマは「近代とは何か」。この 大テーマの中で芸術とは何か、近代芸術とは何な のかを考え、展開しています。そして今、近代美術 を超克、超えたいという思いがあります。これはマ ルセル・デュシャン (1887-1968) [※2] が我々に言い 残していった一種の遺言です。

70年代の美術界と「今日の作家展」

戦後、日本が文化的な国に生まれ変わったというこ とを最初に世界に知らしめたのは神奈川県なんで す。鎌倉に1951年に神奈川県立近代美術館鎌倉 館ができ、1952年に神奈川文化賞が、そして横浜 市に1964年に横浜市民ギャラリーができます。そ の中で一番象徴的な展覧会が「今日の作家展」 でした。多くの活きのよい作品群、作家たちがみん なここから発生しました。そういう時にやっぱりあの 建物。〈もの派〉にもってこいの建物でした。あた かも、もの派を予見したかのような。菅木志雄君は 階段を半分砂で埋めて階段じゃなくするという斬新 な作品を発表しました。そういう面白いことができた のはあの場所ですよね。

60年代は松澤宥さん (1922-2006) を中心に観念 アートが結構主流でした。また東野芳明さんや瀧 口修造さんなどの批評家が戦後から活躍して、ま るでデュシャン的な発想というものがなぜか日本で は特別に培養されていました。そのトップバッターが 高松次郎です。私は高松次郎を尊敬していました。 60年代末に海外の影響でもの派みたいなものが 生まれてきましたが、当時私は、田村画廊[※3]で の個展の作品などでは床に1メートル穴を開けてそ こに水を入れた[図3]。この下が地面なんだと。私 たち多くの若手はその頃、もの派に対抗してもの 派的なこともやっていたんですよね。私はその頃生 意気で、もの派も写真に撮れば「こと派」じゃない かって。もの派はものと物の出来事だろうってうそ

14

ぶいていました。鉄板と石の出来事を、私は写真 を撮れば作品にできると。後に我々は〈概念派〉と 呼ばれ、言葉や文字を扱うような哲学的なアーティ ストの側に入れられて、小清水漸君とか吉田克朗、 李禹煥さんたちがもの派となりました。そういう人た ちが70年の今日の作家展にも参加しています。今 やもの派は戦後日本の中で〈具体〉に匹敵する国 際的なものになるかもしれないですね。そういう運 動体を育んだ場所の中では、恐らく横浜市民ギャ ラリーが一番かっこよかったと思います。

私は結構テーマ主義で、(1975年「今日の静物・展」で) 静物というテーマが出ると、消しゴムだって静物だろ うという風に考え、静物画じゃなくて《静物》という 作品を出しました。(1976年「今日の〈空間〉展」で)空間 といわれれば、世界中に手紙を送って世界中の作 家が手紙をやりとりするアートを展示して。航空便に よって今日の空間を検証する。たった100円ぐらい で世界と通信できるんだから。

絵画の制作と近代への問い

デュシャンが大事なことを言っています。「近代絵画 というのはあまりにも網膜的すぎる」と。それでデュ シャンは自分で《大ガラス》(正式名称は《彼女の独身 者たちによって裸にされた花嫁、さえも》。1915-1923年制作、 フィラデルフィア美術館蔵)をつくりました。彼の作品の 後ろ側には500年のヨーロッパの美術の伝統が活 かされています。彼は遠近法を研究しただけではな く、イコノロジーもきちんと研究した。100年間誰が

- [※2] 美術家。フランス生まれ、後に米国籍 を獲得。既製品を用いた「レディ・メイ ドーなどコンセプチュアル・アートの先 取け的な作品を登表 後の美術に大 きな影響を与えた。
- [※3] 田村画廊はかつて日本橋にあった画 廊(後に神田に移転)。同個展会期は 1971年6月21日~27日。
- 「※4] ドイツの現代美術家、社会活動家。初 期のフルクサス参加。「社会彫刻」を提 唱し、芸術の概念を社会に及ぼすこと に力を注いだ。

図3 田村画廊での展示風景(1971年)

被昇天としての「大ガラス」、

アクリル 若江漢字氏蔵

図5 カスヤの森現代美術館外観

さえも》2015年 キャンバス、

図4 若汀漢字《解読された聖母





図4

見ても色んな解説が出てくるようなもの、豊穣なも 作家です。近現代美術の入り口がデュシャン、出

若江漢字(わかえ・かんじ)

1944 構須賀市生まれ

1969 現代日本美術展出品、 日本版画協会展新人賞受賞 1973 第12回サンパウロ・ビエンナーレ

出品(同、第20回(1989年)) 1974 「第9回東京国際版画ビエンナーレ」

文部大臣賞受賞 1975 「ギャラリーm」での個展のために 西ドイツ、オランダに滞在

1982 文化庁芸術在外研修員として 西ドイツ、ヴッパータル総合制大学 に学ぶ

1984 雑誌 「アトリエ」 に 「ボイス・ノート|連載

1986 「神奈川 芸術-平和への対話 | 展 を企画開催 (大倉山記念館)

1987 西ドイツ、ヴッパータル市に アトリエを設ける(~1995年)

1989 「自立した写直・実験的映像 1839-1989」 ビーレフェルド・ クンストハーレ(西ドイツ)

1994 カスヤの森現代美術館を開館

2004 個展「今日の作家IV 若江漢字 時の光の下に (神奈川県立近代美術館)

2011 個展「横須賀・三浦半島の作家 たち፤ 若江漢字」(横須賀美術館)

2015 For a New World to Come: Experiments in Japanese Art and Photography, 1968-1979 出品 The Museum of Fine Arts. Houston (ヒューストン)

2018 第67回神奈川文化曾受曾

上記のほか個展、グループ展多数

のを彼が持っているということです。

私たちの21世紀の美術はどうあるべきか、それはや はり眼に見える表面だけでなく作品の後ろ側に色ん な思想や価値観や哲学があるようなものでなけれ ばいけない。「私」というものが出てきたのは近代で すよね。フランス革命以来 「私 | がどんどん出てき て、私小説、私芸術というのも当然のように現れま した。この「私」は何なのかと。だから私は美術史を もう一度咀嚼し直して、自分の絵画の中で活かそう としています。また模範とする芸術家がどういう一生 を遂げたのかを見て参照しながら、自分や自分の価 値観はどうあるべきかというのを考えています[図4]。

デュシャン、ボイスからの影響

やはりデュシャンからは大きな影響を受けました。ま た私がたまたま行った国がドイツという同じ敗戦 国でしたが、当時ドイツにはヨーゼフ・ボイス (1921-1986) [※4] という芸術の社会性を大いに発言して いた人が現れていて、彼に出会うわけです。彼の ことは日本で70年代に雑誌を通じて作品を知っ ていましたが、1975年に西ドイツで実際に多くの 作品を見てショックを受けました。デュシャンは割 と黙って作品をつくり、作品は80点くらいしかない。 ているんです。 ボイスは何千点、何万点。一つの版画ですら何千 点も刷ります。そしてありとあらゆるところで喋って アジテーションみたいなことをやる。全く正反対の

口がボイスです。

カスヤの森現代美術館

芸術家、特に20世紀から21世紀の芸術家は、ボイ スが象徴しているように新しい思想、価値観、哲学、 そして新しい倫理観、また社会に対する新しいビ ジョンを持ち、それを作品にして伝えていかなけれ ばいけない。そして、その芸術家のライフスタイルま でもが模範にならなくてはいけない。そうすると私は 自分で美術館をつくり、一人の作家の生き様はこ うだよということを示すために運営しています。自分 の作品だけじゃ間に合わないんです。アーティスト が美術館をつくると、たいてい自分の美術館でしょ う。だけど私はもっと社会的なことをしなくてはいけ ないと思っています。だから私個人の作品だけでは なく、同時代の作品をより多く展示しているのです。

今74歳なので、絵画における自分の代表作的なも のを制作中です。この作品でやっと絵画の中で自 分のことが成就したと思っています。だからそれが 完成したら再来年ぐらいに敷地内に小さな建物を つくって、そこに松澤宥さんの小さな絵と私の写真 と絵画を展示しようと。そこに飾る絵はもう決まっ

15

p13~15の図版はいずれも若江漢字氏提供

INTERVIEW | 若江漢字 INTERVIEW | 若江漢字

1964-1989 (昭和39-64/平成元) 年表 横浜市民ギャラリー編

〈凡例〉

・「今日の作家展」は会期、タイトル、開催委員および企画、出品作家を記した。

・その他の項目は主なもののみ示した。

西暦	横浜市民ギャラリーの出来事、主催展覧会 (主なもの)	★美術界の動向 ●社会		
1964	4/1 横浜市民ギャラリー開設 6/17~7/8 「今日の作家64年展」	4月 6月 7月	★読売新聞社が「読売アンデバンダン展」の中止を通達 ●日本がIMF8条国に移行 ●日本がOECDに正式加盟 ★「アンデバンダン64」展(東京都美術館) ★「全日本アンデバンダン展」(横浜市民ギャラリー) ●東京オリンピック開催	
	10/20~11/19「世界現代美術展」			
1965 (昭和40)	9/7~16 第1回「横浜市こどもの美術展」 11/5~15 「今日の作家65年展」 回事到 針生一郎、東野芳明、加藤衛、川添登、吉原慎一郎、吉沢忠、瀧口修造、園田敬男、中原佑介、瀬木慎一 で西正3 売川修作、井上武吉、宇佐美圭司、岡郎繁夫、加藤清美、菊畑茂久馬、志水晴児、白髪一雄、高崎元尚、栃木順子、藤田昭子、松本陽子、森本紀久子、 <mark>吉仲太造</mark>	9月	●ペトナム戦争激化 ★第6回リュブリアナ国際版画展で池田満寿夫6受賞 ●日韓基本条約調印 ★第8回サンパウロ・ビエンナーレで菅井汲がグランプリ受賞 ★第4回パリ青年ビエンナーレに工藤哲巳6出品 ●朝永振一郎にノーベル物理学賞	
1966 (昭和41)	10/14~26 「今日の作家66年展」 「本記録」 10/14~26 「今日の作家66年展」 10/14~26 「今日の作家66年展現 10/14~16 「今日の作家66年展現 10/14 「今日の作家66年展刊 10/14 「今日の作家66年展刊 10/14 「今日の作家6	6月	★「現代美術の動向展」(国立近代美術館京都分館) ★第33回ヴェネチア・ビエンナーレで池田満寿夫がグランプリ受賞 ●ビートルズ来日 ●新東京国際空港建設地を成田市(三里塚)に閣議決 ●中国で文化大革命起こる ★エンバイラメントの会が「空間から環境へ」展を開催(松屋銀座)	
1967 (昭和42)	9/30~10/12 「 岡本太郎展 」 10/15~26 「今日の作家67年展」 『聖祖』 10年年 (15年度)	8月	●第三次中東戦争勃発 ★岡本太郎が万博のテーマ展示プロデューサーに決定 ●公害対策基本法の布 ●東アジア諸国連合 (ASEAN) 結成 ★第9回サンパウロ・ビエンナーレで吹田文明が受賞 ★第5回パリ青年ビエンナーレで高松次郎、三木富雄5受賞	
1968 (昭和43)	11/1~11「今日の作家68年展」 「西蓮君」針生一郎、東野芳明、加藤衛、川添登、吉原慎一郎、吉沢忠、瀧口修造、園田敬男、中原佑介、瀬木慎一四四百五 飯田善国、泉茂、稲葉桂、今中クミ子、牛玖健治、小野教治、木村直道、斎藤顕治、篠原有司男、土谷武、豊島弘尚、馬瑪彬、吹田文明、前山忠、宮脇愛子、最上寿之、森口宏一、山本圭吾、吉村益信、吉原英雄	10月 11月	●パツで5月革命起こる ★第34回ヴェネチア・ビエンナーレで高松次郎が受賞 ●文化庁設置 ●東大約争で安田請置占拠 ★第1回神戸須磨離宮公園現代彫刻展 ★第6回東京国際版画ビエンナーレで野田哲也が国際大賞受賞 ●三億円事件 ●川端康成ノーベル文学賞受賞	
1969 (昭和44)	11/7~18「今日の作家69年展」		★第8回リュブリアナ国際版画展で加納光於ら受賞 ★美術家共闘会議結成 ●アメリカのアポロ11号月面着陸 ★第6回パリ青年ビエンナーレで横尾忠則がグランプリ、関根伸夫ら団体 賞受賞	
1970 (昭和45)	10/20~30「今日の作家70年展」	5月 6月 11月	●日本万国博覧会開幕(大阪) ●よど号ハイジャック事件 ★千円礼裁判で赤瀬川原平の有罪確定 ★米国が戦争記録画約150点を返還、永久貸与 ★第10回日本国際美術展 [人間と物質](東京都美術館) ★第35回ヴェネテ・ビエンナーレに荒川修作、関根伸夫が出品 ●日米安保条約自動延長 ★第1回ソウル国際版画ビエンナーレで吉田克朗が大賞受賞 ●三島由紀夫が自衛隊占拠、自殺	
1971 (昭和46)	10/30~11/10 「現代日本版画展」	6月 8月 9月	●「戦後美術のクロニクル」(神奈川県立近代美術館) ●沖縄返還協定関印(翌年5月発効) ●ドルショック ★第11回サンパウロ・ビエンナーレで靉嘔ら受賞 ★第7回パリ青年ビエンナーレで榎倉康ニが受賞 ●円切り上げ実施	
1972 (昭和47)	10/29~11/9「今日の作家72年展」 「「「「「「「「「」」」」」 「「「」」」 「「「」」」 「「」 「「」 「 「	3月 6月 8月 9月	●冬季オリンピック札幌大会 ●浅間山荘事件 ★具体美術協会解散 ●ウォーターゲート事件(アメリカ) ★第1回ノルウェー国際版画ビエンナーレで木村光佑がグランプリ受賞 ●日中共同声明調印 ★第6回東京国際版画ビエンナーレで高松次郎が国際大賞受賞	
1973 (昭和48)	11/3~14「今日の作家73年展」 『『聖祖』 針生一郎、東野芳明、加藤衛、川添登、吉原慎一郎、吉沢忠、中原佑介、瀬木慎一 『聖祖』 青山光佑、荒木哲夫、因藤寿、江口週、小野木学、角永和夫、小本章、坂爪厚生、中村富紀子、二村裕子、二見彰一、堀浩哉、眞板雅文、雅子+尚嘉、村岡三郎、森秀男、柳新也、山下清澄、山中信夫、脇田愛二郎	2月 8月	●ベトナム和平協定調印 ●日本、変動相場制に移行 ●金大中事件 ★第12回サンパウロ・ビエンナーレに高松次郎、若江漢字5出品、下谷千 が受賞 ●第4次中東戦争 ●第一次オイルショック	
1974 (昭和49)	7/5 横浜市民ギャラリー教育文化センター内に移転 11/1~12 「今日の作家選抜展」 11/2~12 「今日の作家選抜展」 11/1~12 「今日の作家選抜展」 11/1~12 「今日の作家選抜展」 11/1~12 「今日の作家選抜展」 11/1~13 「今日の作家選抜展」 11/1~13 「今日の作家選抜展」 11/1~14 「今日の作家選抜展」 11/1~15 「今日の作家業技術展表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表	4月 6月	●小野田寛郎元少尉30年ぶり帰国 ★モナ・リザ展開催(東京国立博物館) ★第5回クラコウ国際版画ビエンナーレで島州一、豊島弘尚ら受賞 ●朴正煕韓国大統領狙撃事件	
1975	12/4~14「今日の静物・展」 配表到 中原佑介 [配系] 靉嘔、青山光佑、栗津潔、飯田昭二、榎倉康二、海老原嗪、岡本信治郎、上矢津、 北山泰斗、久里洋二、五月女幸雄、島州一、鈴木慶則、関根美夫、建畠党造、中西夏之、野田哲也、八田淳、 原口典之、福田繁雄、寅板雅文、山本荷士、矢柳剛、 吉仲太造 、吉村益信、著江漢字	4月 10月	★神奈川県民ホールギャラリー開館★アーチスト・ユニオン結成★第13回サンパウロ・ビエンナーレで山口勝弘が受賞●第1回先進国首脳会議(サミット)	

西暦	横浜市民ギャラリーの出来事、主催展覧会(主なもの)	★美	★美術界の動向 ●社会			
1976 (昭和51)	11/1~14 「今日の〈空間〉展」 [空国 アーチスト・ユニオン 四三位 四三位		●南北ベトナム統一 ●ロッキード事件で田中角栄前首相逮捕 ★第2回シドニー・ビエンナーレに 複倉康二、 管本志雄ら出品			
1977 (昭和52)	11/18~29「今日の作家 〈絵画の豊かさ〉展」 図画 業村敏明 四個国語 伊藤純子、狗巻賢二、櫻倉康二、柴田雅子、清水誠一、曹木志雄、 諏訪直樹、高松次郎、山本一郎、李馬煥	6月 9月	★第12回リュブリアナ国際版画ビエンナーレで野田哲也がグランプリ受賞 ★ドクメンタに高松次郎、李禹煥ら出品 ●王貞治初の国民栄誉賞 ●ダッカ日航機ハイジャック事件 ★第14回サンパウロ・ビエンナーレで松澤宥が受賞			
1978 (昭和53)	11/2〜12「今日の作家〈表現を仕組む〉展」 12回 岡田隆彦 四面 四面 四面 四面 四面 四面 四面 四	6月 8月	●新東京国際空港開港 ★第38回ヴェネチア・ビエンナーレに機倉康二、菅木志雄が出品 ●日中平和友好条約調印 ●日米安保協議委員会が「日米防衛協力のための指針」決定			
1979 (昭和54)	11/24~12/5「今日の作家'79展」 「四島州一、高山登、東野芳明、眞板雅文 四島田野 池田徹、伊藤弥生、植松奎二、越後紀子、榎倉康二、沖啓介、倉重光則、曹木志雄、高山登、東野芳明、八田淳、眞板雅文、島州一、村岡三郎、和田守弘 「江田島 Arnuif Rainer、Barry Flanagan、Dieter Kreig、藤原和道	3月	●イラン革命 ●第二次オイルショック ●スリーマイル島放射能漏れ事故 (アメリカ) ★原美術館開館 (東京)			
1980	11/16~30「今日の作家〈感情と構成〉展」 国 藤枝晃雄 四部第 1 川俣正、須賀昭初、中上清、中村功、根岸芳郎、福島敬恭、山田正亮	6月	●光州事件 (韓国) ★第39回ヴェネチア・ビエンナーレに榎倉康二、小清水漸6出品 ●イラン・イラク戦争勃発			
1981 (昭和56)	11/19~12/3「今日の作家〈壁〉展」 図画 秋田由利 四部(第3 天野博之、天利道子、井川愷売、岡崎乾二郎、荻野裕政、川俣正、柏原えつとむ、串田治、 斎藤養薫、永崎通久、前田一澄、三宅康郎、三代川和美、森口宏一、森田秀、守屋行彬 【72-723(11-21,23)] 宇自可伶、太田洋子、山本佳奈		★ [1960年代─現代美術の転換期] (東京国立近代美術館) ●中国残留処児初の正式来日 ★第16回サンパウロ・ビエンナーレに菅木志雄ら出品			
1982 (昭和57)	11/11~24「今日の作家展〈NOVEMBER STEPS〉」 配国東野芳明、海老塚耕 四国国国 出光真子、海老塚耕一、遠藤利克、沖啓介、北山善夫、草間彌生、 佐々木悦弘、高沢直代、田窪恭治、菱沼良樹、前本彰子、矢野美智子、山本容子、横尾忠則、吉澤美香	4月	●ホテル・ニュージャパン火災 ●日航機羽田沖墜落 ●500円硬貨発行 ●フォークランド紛争 ★第40回ヴェネチア・ビエンナーレに彦坂尚嘉、川俣正6出品			
1983 (昭和58)	11/18~29「今日の作家展〈内面化される構造〉」 図画 早見尭 四西運動 井川惶亮、伊藤誠、岡崎乾二郎、桜井英嘉、高木修、高澤直代、竹田康宏、 長重之、長沢秀之、根岸芳郎、古川流雄、松本陽子	9月	★第4回ソウル国際版画ビエンナーレで元永定正がグランプリ受賞 ●ソ連が第空侵犯の大韓航空機を撃墜 ★「現代美術における写真―1970年代の美術を中心として」(東京国立近代美術館) ★第17回サンパウロ・ビエンナーレに小清水漸ら出品 ●三宅島大噴火			
1984	11/10~25「今日の作家展「面」をめぐる表現の現在」 図面 たにあらた 四面(変) 大竹伸郎、柏原えつとむ、北山善夫、関口教仁、高松次郎、高見沢文雄、田窪恭治、 日比野克彦、福島敬恭、堀浩哉、山倉研志、李禹煥		★ヨーゼフ・ボイスが来日 ●ロサンゼルス・オリンピックにソ連、東欧諸国不参加			
1985 (昭和60)	11/9~24「今日の作家'85展〈インスタレイションとは何か〉」 図 千葉成夫 四番番 阿部守、柏原えつとむ、桂ゆき、蔵重範子、剣持和夫、白岩繁夫、曹木志雄、平林薫、藤浩志、保科豊己、三宅康郎、森田秀	8月 9月	★第18回サンパウロ・ビエンナーレに斎藤義重、横尾忠則ら出品 ●日前機123便墜落事故 ●ブラザ合意 ★「日本の前衛美術 1945-1965」(オックスフォード近代美術館、イギリス			
1986	11/14~27「今日の作家展'86〈現代美術の黙示録I〉」 図目日夏霞彦 四部注3 松澤宥、曹木志雄、米谷栄一	4月 6月	●スペースシャトル・チャレンジャー号爆発事故 (アメリカ) ●男女雇用機会均等法施行 ●チェルノブイリ原子力発電所事故 (ソ選 ★第42回ヴェネチア・ビエンナーレに若林奮、 眞板雅文が出品 ★「前衛芸術の日本 1910-1970」 (ポンピドゥーセンター、フランス)			
1987	11/19~12/3「今日の作家〈位相〉展」 配画千葉成夫(1:素材が作品になる処)、たにあらた(2:アモルファス[非晶質]'87―絵画の場合)、 日夏霞彦(3:現代美術の黙示録II) 回函配記: 1: 國安孝昌、豊平ヨシオ、能勢孝二郎 2:小田中康浩、坂口登、 芝章文、中村一美 3: 菅野由美子、辻けい、中川政昭、矢嶋美枝子	6月	●国鉄民営化 ★ドクメンタ8に遠藤利克、川俣正6出品 ★第19回サンパウロ・ビエンナーレに川俣正6出品 ●ニューヨーク株式市場株価大暴落(ブラック・マンデー)			
1988	11/11~26「今日の作家〈多極の動態〉展」 「四日中村英樹 四日本 中 中 中 中 中 中 中 中 市 中 市 東 市 中 市 東 市 市 中 市 市 市 市	4月 6月	●青函トンネル開通 ●東京ドームオープン ●瀬戸大橋開通 ★第43回ヴェネチア・ビエンナーレに戸谷成雄、植松奎二ら出品 ●リクルート疑惑発覚 ●イラン・イラン戦争停戦			
1989 (昭和64、平成元)	11/11~26「今日の作家展〈かめ座のしるし〉」 図3 孝村敬明 四523 青木野枝、上野慶一、大森博之、小野初代、笠原たけし、加茂博、川越悟、北辻良央、橘田尚之、 <mark>草間彌生</mark> 、黒川弘毅、小泉俊己、小清水漸、笹谷晃生、清水誠一、杉全直、辰野登恵子、田渕安一、戸谷成雄、長沢英俊、野村仁、彦坂尚嘉、舟越直木、矢野美智子	3月 4月 5月 6月 10月	●裕仁天皇没 平成に改元 ●横浜博覧会開催 ●消費税スタート ★広島市現代美術館開館 ●天安門事件(中国) ・第22回サンパウロ・ビエンナーレに若江漢字5出品 ●ベルリンの壁撤去開始(ドイツ) ★横浜美術館開館 ※ 一原有徳、秋岡美帆は本年表以後の「今日の作家展」出品作家で			

17 年表

作品リスト

作家名	作品名	制作年	技法	サイズ (縦×横×奥行) cm
第1章 1964-1	973 (昭和39-48)			
大野 増穂	Work 73-3-18	1973	アクリル、キャンバス	162.2×130.6
岡田 博	イマジネーション 靴	1967	靴の木型、絵具、白色下地、キャンバス、パネル	70.5×91.5×14.0
岡本 太郎	まひる	1963	油彩、キャンバス	91.1×73.1
加藤 清美	旅の始めに	1969	エッチング	44.7×57.2
加藤 清美	旅の終わりに	1969	エッチング	44.6×55.5
草間の瀬生	無限(2)infinity	1953-84	エッチング	24.6×41.1
斎藤 顕治	擬態	1965	鉄	60.0×58.0×58.0
斎藤 義重	ボウパンA・白	1971	合成樹脂、アルミ板	72.7×60.6
斎藤 義重	ボウパンC・青	1971	合成樹脂、アルミ板	72.3×60.3
佐藤 努	時間Ω	1948	油彩、パネル (3枚組)	179.0×453.4
佐藤 努	イスラエルの旅	1970	油彩、コラージュ、キャンバス	100.1×80.6
白井 昭子	おかしな夢	1965	エッチング	45.1×64.1
山本 美智代	思考の海	1970	オフセット印刷、レザック紙	47.2×33.7
第2章 1974-	(昭和49-)			
池田 龍雄	連作BRAHMANより V章 点生	1981	油彩、アクリル、紙	53.7×76.7
一原 有徳	EEO	1980-92	アルミニウム、天然腐蝕、ボンド	52.4×81.2
一原 有徳	EB (a)	1981-92	鉄、天然腐蝕	37.7×61.9
稲木 秀臣	グロテスク空間	1977	油彩、キャンバス	130.4×162.4
海老原 暎	ベンチシリーズ 5	1975	リトグラフ	63.6×81.3
小野木 学	Landscape T.L.M	1974	シルクスクリーン	60.1×58.9
小野木 学	Landscape T.L.S	1974	シルクスクリーン	60.3×59.2
加納 光於	耳あるいは西方へ	1983	シルクスクリーン	30.9×34.6
加納 光於	耳あるいは西方へ	1983	シルクスクリーン	30.8×34.7
千田 高詩	LA VIE (白)	1974	油彩、キャンバス	117.0×91.0
高松 次郎	青の線と面	1983	ガッシュ、紙	46.6×64.8
馬場を彬	垂直志向 '76	1976	油彩、キャンバス	91.4×91.1
第3章 -1989	(-昭和64)			
秋岡 美帆	そよぎ Sway	1988	NECO、麻紙	77.0×107.0
清塚 紀子 	航跡 1989-C	1989	エッチング、アクアチント、シュガーアクアチント、 コンデッサー、チューブ、はんだ、鉛筆、紙	89.8×59.6
坂口 登	生きている存在と不可解	1986	アクリル、キャンバス (2枚組)	183.7×338.6
島州一	trace 7	1988	シルクスクリーン	55.0×80.0
菅 木志雄	Spreading Wood '86	1986	木、自然石	440.0×240.0×42.5
中林 忠良	転位'88-地-Ⅱ (横浜A)	1988	エッチング、アクアチント	39.6×39.9
中林忠良	転位'88-地-Ⅲ (横浜B)	1988	エッチング、アクアチント	40.3×40.5
宮脇 愛子	うつろひ	1990	シルクスクリーン	75.9×114.8
村上善男	R気団 76-7	1976	アクリル、コラージュ、キャンバス	194.0×130.0
村上善男	風触 76-9	1976	アクリル、コラージュ、キャンバス	194.3×130.0
元永 定正	さんつながり	1988	シルクスクリーン	49.1×68.2
吉田 克朗	Work"170"	1988	フォトエッチング	35.9×51.9
吉田 克朗	Work"171"	1988	フォトエッチング	35.9×52.3
若江 漢字	ヘイト・アパルトヘイト	1990	ステンシル	72.7×52.6
若江 漢字	Winter	1990	ステンシル	66.5×50.5
 特集展示 吉仲	 中太造、その表現	,		
吉仲 太造	母子	1961	顔料、砂、パネル	242.3×181.9
吉仲 太造	死の売り声 (釘A)	1963	新聞紙、釘、綿、白土顔料、パネル	181.5×181.8
吉仲 太造	碑	1964	新聞紙、鉄鎖、鍵、パネル	181.6×242.4
吉仲 太造	大いなる遺産	1967年頃	新聞紙、鉛筆、パネル	181.8×226.8
吉仲 太造	朝	1974	シルクスクリーン、油彩、キャンバス	91.3×116.9
吉仲 太造	昼	1974	シルクスクリーン、油彩、キャンバス	91.6×117.2
吉仲 太造	夜	1974	シルクスクリーン、油彩、キャンバス	91.7×116.8

謝辞

この展覧会を開催するにあたり、多大なご協力をいただきました次の個人、関係機関に深く感謝申し上げます。(敬称略)

秋岡俊成

池田龍雄

岡田静ヨ

岡田顕

奥村久美子

加藤綾乃

草間彌生

斎藤和土

佐藤文江

清水みどり

菅木志雄 千葉由美子

冨沢里多

中林忠良

馬場栄子

藤井亜紀

光田由里

村上美智子

吉田有紀

若江漢字 若江栄戽

公益財団法人岡本太郎記念現代芸術振興財団

カスヤの森現代美術館

株式会社草間彌生

株式会社シー・アール・エス

東京都現代美術館

ユミコチバアソシエイツ

展覧会情報

横浜市民ギャラリーコレクション展2019 昭和後期の現代美術 ―1964~1989― Contemporary Art in the Late Showa 1964–1989

横浜市民ギャラリー

2019年3月1日[金]~17日[日]

10:00~18:00 (入場は17:30まで)

入場無料

会期中無休

横浜市民ギャラリー展示室1、B1

主催 |横浜市民ギャラリー(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団/西田装美株式会社 共同事業体)

関連イベント

講演「1964年から: 現代美術と横浜市民ギャラリー 吉仲太造を中心に」

3月3日 [日] 14:30~16:00

会場|横浜市民ギャラリー 4階アトリエ

出演 | 光田由里 (美術評論家)

学芸員によるギャラリートーク

3月10日 [日] 14:00~14:30

会場 | 横浜市民ギャラリー展示室1、B1

鑑賞サポーターによるトーク

3月9日[±]、16日[±]14:00~

会場|横浜市民ギャラリー展示室1、B1

本展では6名のボランティアが鑑賞サポーターとして活動しています。事前研修を4回行い、それぞれが選んだ出品作品について調べて、自身の視点を盛り込んだ紹介文を執筆しました (別紙「鑑賞サポーターによる作品紹介シート」に収録)。また、上記日程でトークを開催します。

鑑賞サポーター

佐藤秀治、佐藤祐介、佐野康之、早田圭子、三橋泰子、山田稔

学芸担当|齋藤里紗、大塚真弓、河上祐子

執筆|齋藤里紗

アートディレクション | 加藤賢策 (LABORATORIES)

デザイン | LABORATORIES 印刷 | 株式会社野毛印刷社 インタビュー映像制作 | 播本和宜

編集·発行|

横浜市民ギャラリー (公益財団法人横浜市芸術文化振興財団/西田装美株式会社 共同事業体) 〒220-0031 横浜市西区宮崎町26番地1 TEL 045-315-2828 FAX 045-315-3033 http://ycag.yafjp.org/

©Yokohama Civic Art Gallery 2019